

2016. 4. 14 (木)

関西学院に吹いてきた風

—自由と愛のスピリット—

打 樋 啓 史

「スピリット」という言葉

社会学部では、月ごとのテーマを決めて、チャペルアワーを行っており、4月のテーマは「“KG Spirit” とは」です。別の言い方をすると「関西学院の建学の精神」についてということです。それぞれの学校に「建学の精神」つまり「学校創立の精神」があり、特に関西学院のような私立学校では、それを大切に教育が行なわれます。このテーマでのチャペルを通して、関学の建学の精神、“KG Spirit”を理解する一助にしてもらえればと願っています。

すでに、“KG Spirit”という言葉を使ってきました。「スピリット」とは「精神」を意味する英語ですが、この言葉は聖書に由来するものです。英語で「スピリット」と訳される言葉は、旧約聖書の言語であるヘブライ語（ユダヤの言葉）では「ルアハ」といいます。「ルアハ」は、英語では「スピリット」、日本語では「精神」や「霊」と訳されますが、本来は「風」や「息」を意味する語です。

「風」や「息」は目には見えないけれど、何かを動かす力です。風そのものは見えませんが、風が吹くと物が動くし、息そのものも見えないけれど、生物は息をすることで生き

て動いています。本来「風」や「息」を意味する「ルアハ」が、同時に「スピリット」（精神、霊）を意味するというのは、「スピリット」も「同じように目には見えないけど何かを動かす力である」という理解に基づいています。「スピリット」は人を内面から動かす力、そこから何かが始まっていく力だということです。

ですから、「関西学院のスピリット」とは、127年の関西学院の歴史の中で、そこに関わった人々を内側から活かし、動かしてきた力のことです。言い換えれば、それはこの学院の長い歴史の中にずっと吹いてきた風のこと、宗教的な表現で言えば、その歴史を動かしてきた「神様の息吹」のことです。

皆さんも通学していて気づいたかもしれませんが、実際にこの上ヶ原キャンパスは山の上なので風がよく吹きます。図書館の周りに風車のオブジェがありますね。あれは、このキャンパスには風がよく吹くことを象徴した作品です。また、校歌「空の翼」でも、「風、光、力」というように、上ヶ原キャンパスを特徴づけるイメージの一つとして「風」が出てきます。

「自由と愛」のスピリット

それらに象徴されるように、関西学院という、このユニークな学校の長い歴史の中で、ずっと風が吹いてきました。神様の息吹が歴史を動かしてきました。関学の「スピリット」とは、単にどこかに記されたきれいな言葉なのではなく、そういうダイナミックな力であるということを理解していただければと思います。

私は中学部から関西学院で学んできたので、教員になってからも含めると、すいぶん長い間この学院で過ごしてきたこととなります。中学、高校、大学時代、私はこの学校が好きでしたが、その良さを十分には理解しておらず、「何となくボーッと過ごしている」生徒・学生でした。大学では最初は商学部に入ったのですが、卒業後に専攻を変えて神学部に入部し、大学院まで進みました。その後色々あったのですが、18年前に教員としてここに戻ってきて、はじめて気づかされたのです。ほとんど意識していなかったけど、関西学院にずっと吹いてきた風に自分は大きく影響されて、自分の人生が動かされてきたということに。特に教員になってからは、「関西学院は本当にユニークなよい学校だ」と自信をもって言えるようになりました。

長くいるので悪い面も見えてきますが、「ここは関学のいいところだ」と言えるものが、自分の生き方にかなりの影響を与えたとし、自分を支え励ましてきたと思います。そういう自分自身の体験としても、関学の「スピリット」とは抽象的で静かなものではなく、私たちを動かす風のようなダイナミックなものだと感じるのです。

では、関西学院に吹いてきた風、スピリッ

トとは何か、それについては、今日から「キリスト教学」の授業でも扱うこととなりますが、キリスト教と切っても切れないものなのです。関西学院は1889年にウォルター・ラッセル・ランバースというアメリカ人の宣教師によって創立された学校です。そのバックアップをしたのがアメリカのメソジスト教会なので、関学はキリスト教の教会が創った学校ということになります。

ですから、関西学院が最初から大切にしていたスピリットは、キリスト教のスピリットです。では、「キリスト教のスピリット」とは何か。これはあまりにも大きなテーマで簡単には言えません。しかし、私はキリスト教の中心にあるスピリットは、二つのキーワードに要約できると考えています。それは、「自由と愛」です。キリスト教のエッセンスは、「自由と愛」、それに凝縮されるのです。

それでは、「自由と愛」とは何か。「自由」とは、「好き勝手に何をしてもいい」ということではありません。それは、「自分をしっかり持っていること」です。自分で考えて判断して行動できることです。そして、「愛」は「他者を大切にすること」です。分厚い聖書全体が人間にとって最も大切なこととして伝えているのは、このような意味での「自由と愛」、それに尽きると言ってもよいでしょう。

“Mastery for Service” というスクールモットー

関西学院はこの「自由と愛」というキリスト教のエッセンスになるキーワードを、別の言葉で、スクールモットーとして大切にしてきました。それが、皆さんもよくご存じの

“Mastery for Service” という言葉です。カナダ人宣教師で4代目院長であった C. J. L. ベーツ先生が提唱したものです。

「マスタリー・フォー・サービス」とは、どんな意味でしょうか。よく本学のパンフレットなどには「奉仕のための練達」という、よく分からない日本語で訳されていますが、これはあくまで便宜上の訳であり、そもそも日本語に訳せないモットーなんです。だから、「マスタリー・フォー・サービス」と英語のままて親しまれ、用いられています。

「マスタリー」は「マスター」という言葉からきています。「マスター」とは、「喫茶店のマスター」というように「主人」のことで、「マスタリー」は「主人になること」を意味します。一方、「サービス」は「サービスしときますよ」とかよく使われますけど、もともと「仕える人」や「しもべ」を意味する「サーバント」という言葉からきています。つまり、「サービス」とは、「サーバントになること」という意味です。

こうして見ていくと、「マスタリー・フォー・サービス」とは、「しもべになるために主人になる」という変な言葉であることがわかります。「主人になることを目指して、しもべとしての下積みを積む」というのが一般的ですが、「マスタリー・フォー・サービス」は、「しもべになるために主人になる」という逆説的な言葉です。

では、「主人になる」というのは、誰の主人になるのか。それは、「自分の主人になる」ということです。自分をしっかり持っている。人に流されて右往左往するのではなく、「皆がこうしていて、違うことをするのは怖いから同じことをしておこう」というのではなく、自分で「これが正しい」「これが面白

い」と考えて、判断して、行動できるということ。それが「マスタリー」、つまり「自分の主人になること」です。

もうひとつの「サービス」は、自分をしっかりもっているからこそ、自分のもつものを他の人のために用いていくということ。他の人々の苦しみを和らげたり、他の人々の笑顔を増やしたりすることに、自分の力や能力などを用いていく。これが「マスタリー・フォー・サービス」です。ただ自分が得をするためだけに生きるという寂しい人生ではなく、もっと豊かな人生がそこには広がってきます。

皆さんは、子どもの頃、家や学校などで「勉強しなさい」と言われて、「どうして勉強せなあかんの？」と聞いたことはありませんか。そう聞いたら、「自分のためでしょ！」と言われたことはないでしょうか。「勉強しなさい。」「自分のためでしょ。」色んなところでよく聞かされてきたのではないかと思います。

私もよくそのように聞かされてきましたが、「自分のためでしょ」と言われたときに、「自分のためだったら別にしなくてもええんとちゃうか。自分がそれでちょっと得するぐらいなら、勉強をしない楽な道のほうがええんとちゃうやらか」と思ったことがありました。すいぶんひねくれた子どもだったかもしれませんが、でも、「あなたが勉強することは誰かの役に立つかもしれない。誰かの苦しみを和らげたり、喜びを与えたりすることにつながるかもしれない」と言われたら、どうでしょう。それはいいな、そんな風にできれば嬉しいなと思いませんか。「マスタリー・フォー・サービス」とは、そういうことなんです。

「滅私奉公」という言葉が戦時中ありましたが、「マスター・フォー・サービス」とはそうではなく、むしろ人のために何か役に立てることが結局は自分の喜びになるということです。その意味で、「人のため」と「自分のため」ははっきり分けられるものではないと思います。関西学院は、そのようなスピリットを大切にしてきました。

関西学院を卒業して世の中で活躍しているたくさんの方々の先輩たちには、そのような心を持って、仕事や活動に取り組んでいる人が多いですね。ガツガツとただ自分だけが得ることを求めている、人を蹴落としてでも自分が登り詰めようとする、そういう寂しい生き方は、あまり関西学院らしくありません。自分が本当によいものを修得して、それを精いっぱい社会のため、他者のために用いていく。皆さんはそういう可能性を持った一人一人としてここにいる。そのことをぜひ覚えておいてもらえたらと思います。

バングラデシュの少年

関西学院と直接関係はないのですが、「マスター・フォー・サービス」を考えるときに思い出すエピソードがあります。今から20年以上前、私は教会の牧師をしており、教会関係の青年のグループと一緒にバングラデシュという国を訪ねました。キリスト教の修道院に宿泊して、様々な場所を訪ねる、出会いと研修の旅でした。そのなかで、ストリートチルドレンとの出会いがありました。

ストリートチルドレンは、路上で生活する子どもたちです。バングラデシュは経済的にも貧しい国で、親のいない多くの子どもたちが路上で生活をして、物乞いをしながら、

日々暮らしています。私たちが出会った子どもたちは、鉄道の駅で寝泊まりしていたので、「ステーションチルドレン」です。駅で寝起きしながら、列車の乗客の荷物を持ってチップをもらい、何とか食べて生きている子たちでした。

幼い子から12、13歳ぐらいまでの子どもたちでしたが、その子らは私たちのグループが泊まっていた修道院に時々遊びに来ました。おやつをもらえたり、遊んでもらえたりするし、その修道院のブラザー（修道士）たちのことが大好きだったからです。私は駅でもその子たちを見たことがあったのですが、大人顔負けのとても鋭い目、ある意味ですさんだ目つきをしていたのが印象的でした。そうでなければ、生きていけない現実があるからです。でも、教会に来て遊んでいるとき、その子たちの顔は子どもの表情に戻り、おやつを食べたり、サッカーをしたり、塗り絵をしたりしていました。

この子どもたちは、私や学生たちに、時々「お金をちょうだい」と言ってきました。彼らには親がいまませんから、「お小遣いをちょうだい」と親にせがむようなものです。そういう場合にはどのようにしたらよいか、修道院の責任者のブラザーに尋ねたら、「お金はあげないでください。それは良くない結果につながることがあります。お金ではなく、愛をもってお菓子をあげてください」と言われたので、飴やチョコレートをいつもポケットに入れておいて、お金をせがまれたらお菓子をあげるようにしていました。

ある日、この子どもたちと一緒にサッカーをしていたとき、また一人の男の子が「お金ちょうだい」と言ってきたんです。その日、私は「ベビーチョコ」といって小さい粒々の

チョコレートがプラスチックのケースにいっぱい入っているものを持っていて、そのチョコレートを子どもたちに少しずつあげると、みんなは喜んで食べて遊びに行きました。

ところが、1人の男の子がそばに残っていた、「残ったチョコレート、全部ちょうだい」と言ってきたのです。「みんなに等しくあげたから、もうダメ」と言って断ったのですが、彼は泣きまねをしたり、おどけたり、服を引っ張ったり、とにかく全部くれるまで動かないという感じで、ありとあらゆる手を使ってチョコレートを手に入れようと努力していました。私も面倒くさくなってきて、他の子どもたちには内緒で、結構たくさん残っていたチョコを全部この少年にあげたのです。

さて、チョコレートの残り全部を手に入れたこの少年は、その後どうしたと思いますか。彼の行動を見て、私はびっくりしました。自分だったら間違いなく、こっそりポケットに入れておいて、あとで自分一人で食べると思います。でも、この少年は違いました。まず、サッカーをしている仲間たちの所へ走っていき、自分が獲得したチョコを皆に等しく配ったのです。さらに、日本人の学生たちにも配り、最後には私にもくれて、自分が食べる分はごくわずか、数粒しか残っていませんでした。でも、彼はすごくうれしそうな顔をして、そのわずかなチョコレートを食べていました。

「マスタリー・フォー・サービス」とは、

こういうことではないかと私は思います。つまり、まずあらゆる努力をして手に入れるのです。この場合は、チョコレートですが、少年はそれを「マスター」したわけです。でもそれは、自分が食べるためではなく、皆を喜ばせるために手に入れたということなのです。

その日はちょうど列車のストライキの最中でした。列車の乗客がいないので、彼らは仕事がありませんでした。後から修道院のブラザーから聞いてわかったのですが、ストライキの最中、この子どもたちは十分に食べることができず、ひもじい思いをしていたのです。少しのチョコレートであっても、飢えている自分にとってはとても貴重だった。だからこそ、同じようにひもじい思いをしている仲間たちにとっても貴重であることを、少年は分かっていたのです。

皆さんがこの関西学院でマスターするもの、手に入れるもの、それはチョコレートどころではありません。色々なもの、とても貴重なものを、これからの学びの中で身に付けて、マスターしていく。そうして、自分自身の「マスター」になっていくのです。そのようにマスターしたものを、どのように用いるかは皆さん次第です。それを考えるときに、このバングラデシュでの私の出会いのことを、この少年の心を、どこかで覚えておいていただければ幸いです。

(社会学部教授・宗教主事)